

～TANKYU～

谷地南部小学校
校内研究だより
2022. 8. 29
No.17 文責 荒木秀

第3回研究全体会を終えて③

Q3 小林先生にもっと質問したかった、教えてほしかったということはありませんか？

- 子どもたちの問いが出てくるような授業を組み立てる術をつかみたいと思いました。
- 子どもが考えたくなる教材の厳選が必要だと教えていただいたが、厳選するときを考えるポイントがあれば、知りたいと思いました。
- 1年生が自分たちでつくる授業の具体例を知りたいと思いました。
- 教育展望にあります「カリキュラムの二つの顔」について詳しく教えていただく機会があればと思いました。
- 単元構想の方法について。
- こういう子供を育てたい(例えば、相手を尊重する子とか)と思って、さあやってみようと思き出す時に大事なこともやらずやらないといけないことって何でしょう？
- 話をすることが苦手な子への有効な手立てがあれば教えていただきたいです。
- 個別最適化や多様性という言葉を目にするようになったが、(真面目に)やっていくと時間も労力もかかってしまうのではないかな。具体的にやれそうなこととは何でしょう。どういう共通認識でいけばよいのでしょうか。

先生方のリフレクションを読んで、「なんだ、先生方こんなに聞きたいことあったんじゃないか。あのとき、出してくれればよかったのに。」というのが率直な感想です。でも、あの場で質問するのって勇気がいりますよね。先生方が安心して話ができる空間にならなかったことは、進行役（ファシリテーター）である私の反省点です。授業と一緒にですね。

私ごとですが、大学院に行って学んだことの一つに「授業は自由に話をしている」ということがあります。教育の専門家である大学の先生を前に、自分の考えを話すなんて怖いなんて思っていたのですが、実はそうではない。授業のほとんどがディスカッションで、教える・教わるという関係ではないことを実感しました。「こんなこと聞いていいのかな。」なんて不安がらず、まずは声に出してみませんか。だって、私たち教師は子ども達に自由にたくさん話をしてほしいんですよね？授業の中では、どんなに拙い質問でも大事に扱いますよね？子ども達に求める前に、まずは自分がやらなきゃですよ。

実はあの後、小林先生とこの点についても話をし、今回はこうならないように二人で作戦を練ったところです。次はファシリテートがんばります。